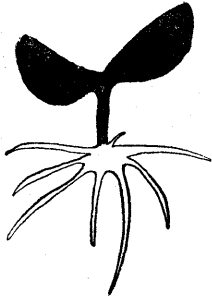


エリクソンと幼児教育 (15)



仁 科 弥 生

同一性の危機 ルターの場合(2)

青年期は、若者が古いものを捨てて新しいものを選びとり、それに身をゆだねることに熱心になる年代であり、また、何事についても決断をもっとも自覚的な形で行おうとする年代である。古いものとして捨てられるものは、その若者のそれ以前の生活であり、それは普通、両親の生活様式に内在している価値観に対する疑問視や否定となつてあらわれる。それだけに、新しい献身すべきものを求める欲求も強く、自分の不確かな精神世界に秩序の装いを与えてくれそうな思想や価値をもった言葉などにことさら敏感に反応するのである。

青年ルターの場合も、自分をつくり、ある意味で自己を決定した両親から自分を解放したいというやみがたい欲求につきうごかされていただろうと想像できる。しかし彼は自分の未来を選択する者として自己を確信することがまだできないでいたと思われる。エリクソンは、このように自分で選択をすることができないとき、或はそ

うすることの責任を引受ける準備がまだできていないとき、若者の社会的な身分はより大きな力で決定されることになるを考える。マルティンの場合、それは神の啓示という形であったということになる。

しかも、マルティンが修道院に入ったことは、彼の父親の野望とはまさに正反対の方向であった。エリクソンは、たとえ高度に理想化された自己像であっても、このような、一人の人間の成長過程における支配的な価値観に真正面から対立するような自己像を否定的同一性の部分と呼んでいる。それは、その人間がそうならないようにと警告されてきた同一性であり、また、分裂した心でしかそうならない自己、しかしそれにもかかわらず心の底から抗議しつつ自らを強いてそうならせる自己を確認するということの意味するという。そして同一性の危機において、若者は権威的な父に反発し、自分の自律性を主張しようとして、あえて否定的な同一性を選びとることもある。マルティンはその古典的な例であろうという。

結局、父ハンスは悪口と不満を並べ立てたあとで、マルティンの修道院入りに同意したと伝えられている。しかし、マルティンは父の誠実さを疑い、それ以後もけっして疑うことをやめようとしなかったという。エリクソンは、この疑惑が宗教的疑惑や権威に対する懷疑へと転化したと考えている。さらにエリクソンの言葉を引用すると、「父が子どもを罰するとき、気まぐれや悪意によってではなく、本当に愛と正義によって罰するのだから」というマルティンの幼少の頃の懷疑が、後年、マルティンの修道院の師たちも認めざるをえなかったあのような激しさをもって、天の父に投射されたのである。それは、師の一人をして「神がきみを憎むのではない。きみが神を憎むのだ。」と言わしめたほどであったという。そのことは「マルティンもまた、自身の義認を必死に探究しながら神を審判者として正当化するような永遠の義の論理を模索していたということである。」とも述べている。

二五歳のとき、ルターはウィッテンベルク大学に移さ

れた。その神学教授であり、アウグスチン派修道院の副院長であったジョン・シュタウピッツは、ルターの苦悩に共感し、ルターにとって何が必要であるかを洞察したすぐれた上司であった。彼はルターと論争することせず、もっぱら彼に講義や説教をさせたといわれる。エリクソンによれば、シュタウピッツは、ルターが「出会い、かつ知りえた最良の父親像」となりえた人物であり、また、同一性の形成に必要な「承認」をルターに与えた人物である。シュタウピッツ自身はおそらく若者の創造性や可能性に郷愁を感じ、ルターの中にある真に宗教的な何ものかに父親的な役割を果たすことに喜びを感じたのであろうとエリクソンは推測する。そしてルターもその師の知性の深さに、完全に頑強な父親像を見いだしたと思われる。

そもそも、強い存在である父親は男の子の同一性をめざめさせる重要な役割を果たすと考えられている。男の子は不安におそわれたり、混乱したりすると、母親のところにどる。しかし、やがて子どもは男であるという

ことの特質を自覚するようになり、父親の男の体の感触や、導いてくれる声を愛することを知ようになる。それはちょうど、自立的な存在にとって必要な、最初の勇氣を子どもがもちはじめの頃であり、父親は子どもの自立的な存在になるための保護者の機能を果たすことになる。そしてその導きの声は子どもの同一性の実感の主要な要素となるというのである。しかも同一性の初期の確立を保護する父親に加えて、子どもは青年期には彼らの確立した同一性を保護してくれる人が必要とする。しかしそこに深くかわることができるのは、ただそれにふさわしい人格をそなえたもつとも幸せな父親だけである、とエリクソンはいう。もしその父親がハンスのように権威的に支配を主張すれば、彼は青年に造反、くすぶり、燃えあがりを引き起こすだけであらうとも述べている。したがって、シュタウピッツとの出会いはルターにとって実に幸運な出来事であった。

ところで、前回でも触れたように、激しやすく、支配的であった父親を恐れて育ったルターは、修道士とし

て、父なる神の前でひどく恐れており、苦悩しつづけていた。そのようなルターにシュタウピッツが与えた助言、すなわち「人間は神の愛を予想するからではなく、それをすでもっているから真にざんげできるのだ」という言葉が、ルターの新しい神学の土台となる基本的洞察を提供したといわれている。エリクソンによれば、その言葉が、ルターに乳児期に母親から与えられたあの信頼感、しかし永年の間失われていた信頼感を回復させ、しかもそのすばらしい宝が最初から人間に与えられていたということを再認識させたのだと解釈されている。そしてルターの徹底した聖書研究が、われわれはただ神の恩寵を信頼するだけでよい、「義とされる」のはただ「信仰のみ」によるという新しい原理にルターを導いたとされている。つまり、「彼は自らの同一性の根本的な力（神の言葉であるが）を見いだした。その義認の実感、肉親の父も、天の父も共にマルティンに対して拒絶していたものであり、宗教人にとっては同一性の基盤となるものであった。」したがって、ルターは神学の教授としてま

た説教者として言葉で明白に述べざるをえなくなつてから、ようやく内面的な一致に到達したことになる。この過程についてエリクソンは次のように述べている。ルターは「講義をするという行為の中で、自己の精神の均衡と同一性を見いだし、さらにそれらをもって神と自分自身との関係に関する新しい体系を見いだした。」そしてエリクソンは、シュタウピッツの示した配慮は、一人の人間にとって必要であるものと、激動している現実世界が要請しているものとを、講義や説教という一つの行動計画の中で結び合わせた適切な処置であったと評価している。またこの目的のために一定の時間がモラトリアムとして必要であったが、ルターの時代には修道院がその役割を果たしたことは興味深い。こうして、ルターはそこで、真の歴史的な敵を知り、その敵を強く効果的に憎むことを学ぶことができたのである。エリクソンは、とくに働くということが創造的な意味と共に治療的な意味をももっていると考えており、オーステイン・リッグス・センターで青年を治療する際に、彼らの働くというこ

との重要性を強調している。つまり労働の中で、彼らは問題を解決し、計画し、社会的な交わりをする適応力を発揮することができるようになると考えられている。そのエリクソンにとって、シュタウピッツが苦悩しているルターに対してとった処置はきわめてすぐれた治療的行為であったと思えたようである。

さらに、エリクソンは、ルターの生きた中世のヨーロッパの歴史を精神分析家の目で問い直している。われわれは、このルター個人の心理的な歴史と中世の歴史という二つの史的過程の、複雑で必要的な絡まりあいの分析に注目しなければならない。なぜなら、そこには、臨床家としての洞察から生まれた、事例を社会や歴史から分離してはならないという彼の持論が鮮明に論証されているからである。

ちなみに、ルターを取りまく歴史的、社会的状況を概観してみると、ドイツの場合、ルネサンスはドイツ人文主義という形で根をおろしたといわれている。十五世紀後半期におけるハイデルベルク大学はドイツ人文主義の

中心地として栄え、エルフルト大学も例外ではなかった。たとえば、人文主義者として有名なヨハン・ロイヒリン（一四五五—一五二二）は、ドイツやフランスの諸大学で古典と法学を学び、法律家としてウエルテンベルク公に仕えていた。彼はイタリアへ旅行し、ユダヤの秘教「カバラ」に興味を抱くようになり、ヘブライ語研究に熱中し、帰国後、旧約聖書をヘブライ語の原典にもとづいて研究を始めたと伝えられている。一五〇三年には、エルフルトの近くのゴータの町でコンラート・ムチアン（一四七一—一五二〇）が人文主義とそれにもとづく新しい神学を樹立するために聖書と教父の研究を進めていた。こうした古典の研究と古典の知識はドイツ人の眼をより広い世界に向けさせ、ドイツ国民という自覚を芽生えさせたという。人々は、むづかしい議論や形式にとらわれずに、「人間的な」要求を満たしてくれる信条を求め、また自分たちの生活にふさわしい信仰を模索しはじめたのである。新敬神派もそのような動きの中で生まれた。ルターが一四歳の時、マグデブルクで接触し、強

烈な印象を受けたといわれる「共同生活兄弟団」はこの派の活動を代表するものであった。この僧侶たちは修道士風な共同生活を営み、宗教を真に貧困の生活の中で生きていた。彼らは聖職員としての宗教的な没頭の深さと純粹さを強調した。また病人の看護や慈善活動や、教育活動なども行ったという。

一五世紀の半ば頃に、ヨーロッパに東方から紙の製法が伝わり、良質の紙が量産されるようになった。そして印刷機の発明によって活版印刷による書物の刊行が可能となり、聖書が普及し、また書物の価格が下がり、教育大衆化が始まったといわれている。このような時代の流れと、やがて火をふくルターの宗教改革とはけっして無縁のものではなかったのである。

さて、エリクソンはホイジンガの『中世の秋』（一九一九年）を引き合いに出している。そして、ホイジンガはフランスとオランダにおける滅びゆく中世についての研究の中で、文学や芸術作品にもとづいて、中世的な同一性の崩壊と、新しい自治都市の市民の同一性の出現と

を記述しているが、エリクソンはその記述がルターの時代および状況にもあてはまると考えている。すなわち、一五世紀には灰色にくすんだ陰うつさが人々の心をおおっていた。人々はこの世界や人生の苦難と悲惨とを見、いずこにも退廃と近い終末のしるしを発見すること、つまり時代を罪とみなし、軽蔑する風潮が蔓延していた。またホイジンガは「まさに終わろうとしていた中世のこの時代ほど、死の思想に大きな強調を置いた時代は他になかった。日ごとに死を憶えよ、という永遠の呼びかけが生活全体を通じてひびきつづけた。」とも述べている。

さらにエリクソンは、中世的な同一性の崩壊について、次のようにとらえている。まずカトリック教会はその最盛期において、ギリシャ思想とキリスト教、理性と信仰の大きな融合をはかり、その結果、「威厳にみちた敬虔、純潔な思想、その時代全体の階層的、宗教的な様式によく合った、統合された宇宙論」を生んだと論じている。またそのような階層制を論理化したローマ教会の天才トマス・アクィナスが宗教儀式の様式化を通して、

聖体拝領の効力を裁判所、街の市場、大学などに広げ、中世の人間の同一性に、色や形や音などのかざりを与えたとその偉業に言及している。そして「中世の宗教儀式執行者は、微に入り細にわたって行為の規律をつくることによって、象徴的、比喩的な秩序の中に、また階級やカスト制という静かなる永遠の秩序の中に人間を位置づけようとした。かくて人間は大げさに多様化された役割と衣装によって保全された儀式との同一性を自分自身に与えることによって、大から小までの秩序にもにあずかった。」しかし、火薬の発明と印刷機の出現に対して、またペストや梅毒の流行、トルコ人の侵略、教皇と諸侯との争いなどの危険に対して、この儀式的な同一性はほんのい防衛でしかなかったと指摘する。こうして教皇制の精神的衰退やローマ帝国の崩壊は、一方において来たるべき救いに方向づけられていた一般の人々の将来に対する展望を縮小させ、他方ではローマ教会の説得力を維持する手段であった露骨さと残酷さを一層増大させることになったという。かくて「マルティンの幼児期、青年期

には、世界に関するマルティンの思想的な視野の中では、人間の魂は滅ぶべき体の中には真実の同一性を見いだすことができない、つまり不可避免的な罪深い存在としての人間という理解がしみこんでいたといえよう。このような世界観にはただ一つの希望しか残されていなかった。すなわち、唯一の真実なる同一性、唯一の真実なる實在——それは神的な怒りであった——、その前で憐みを見いだす機会を一人の人間に保証する終末が、いつとはわからない瞬間に到来するだろうという希望である。」と論じている。

この中世の「暗黒時代」が去って、人々が人間性を尊重し、現実主義、合理主義にのっとって生きようとはじめたとき、人々はまず自分たちの精神を封建制の束縛から解放することを求めた。エリクソンは、「精神分析の理論で考えれば、ルネサンスは、すぐれて自我の革命であるといわざるをえないであろう。それは大規模な自我の執行機能の回復であった。」ととらえている。その一つのあらわれが封建支配の道具となっていたカトリック

の教義と道徳から精神を解放することであった。ルターが神学の学士となってエルフルトに帰り、大学で講義を始めた一五〇九年は、エルフルトの歴史で「狂乱の年」といわれている年であった。市参事会を牛耳っていた都市貴族に対する平民の反抗から、全市が革命的騒乱の渦中に投げこまれたのである。ルターがこの動乱をどう受けとめていたかは明らかではないが、既成神学に対する彼の反感はすでにあらわれていたといわれる。したがってルターの言葉は待望されていた土壌に干天の滋雨として注がれたことになる。

このように考えてみると、ルターが学校や大学という世界に入ったとき、彼の内部にあったものは、前回で触れたように彼が幼い頃に受けた教育の矛盾葛藤に由来するものであったが、しかし、それはそのまま、彼を囲み、彼の上にのしかかっていた思想的、歴史的な世界の矛盾葛藤と対応していたとするエリクソンの主張が明瞭になってくる。そしてルターが青年として取り組んだ神学的な問題は、勿論、彼自身の父親との個人的な関係と強く

結びついた問題を反映していたが、しかしそれは同時に社会的、歴史的規模でとらえることのできる問題でもあった。つまり彼の生きていた社会自体も同様の葛藤、同様の危機の中にあつたのである。なぜなら、それらは、道徳の權威が、父親たちに、家庭に、市場に、政治に、城の中に、ローマに投資したものが直面していた危機の一部分だったからである。個人的な問題と世界的な問題とは共に一つの思想的な危機がもっている一部分だからである。

このように、エリクソンは、精神分析を歴史研究の手段として用いて、宗教改革者ルターの青年時代の再解釈をなしとげたのである。すなわち、彼は、ルターが回復しようとした信仰は、乳幼児の初期の基本的信頼への回復であると分析し、また、父との関係の中に、ルターの生涯にわたって重荷となつた過度の罪悪感を読みとつた。「私にはルターのあの特殊な創造性は、フロイトのいう父親コンプレックスとの運命的な格闘のある意味での中世末期の先駆を代表しているように思われる。」とさ

え言わせている。そして、遅延したルターの青年期は、再覚醒された幼児期の葛藤を伴った精神病との境界すれすれの状態を呈したが、それは、彼において時代と社会の崩壊をも内面化されていたことを示すものとしてエリクソンはとらえた。その間、副修道院長シュタウピッツの適切な指導もあったが、彼の内面の分裂を統合し、ようやく福音の新しい発見へと彼を導いたのは、他ならぬ彼自身の成長した自我の能力であったと分析している。こうしてルターが青年期の危機を克服し、最初の詩篇講義において新しい神学をうちたてたとき、ルターは歴史的な同一性を獲得したと、エリクソンは位置づけている。そのとき、ルターは二八歳であった。

また、エリクソンは、このような分析は、「個体発生の経験は歴史のある段階と次の段階を連結し、変形させていく不可欠のきずなであるということ」を十分に例証している。このきずなは心理学的なものであり、変形されたエネルギーとその変形の過程は、ともに精神分析の方法で図式化される。」と述べている。そしてさらに「ルタ

ーの青年期の危機の解決は歴史が西洋キリスト教のある重要な時期につくった政治的、心理的真空を橋渡しするものであった。このような同時発生が、きわめて特殊な人格のめぐまれた才能の展開に一致すると、まさに歴史的な『偉大さ』をつくるものである。」とも述べている。

このことは、発達段階の一つの課題である「同一性の危機」を、既成の宗教がイデオロギーを支配していた歴史の一時代に、一個人がイデオロギーの回復過程で内面的にどうかかわりをもつかという関連でとらえたことになる。すなわち、エリクソンは、イデオロギーの概念を用いることによって、「同一性の形成」という問題を単に臨床的問題としてではなく、普遍的で歴史的な問題としてわれわれに提示したのである。

ところで、今日の青年にとっても、さまざまな経験を十分に調整し、社会的期待と、個人的選択とを重ねあわせて、一つの明確な自己定義へとまとめあげるといふ課題は、むつかしく、また時間のかかるものである。その過程で必ず一時的な混乱や失意を経験する。そのような

苦悩する青年たちを、エリクソンと同じように力づける
神谷美恵子の言葉を引用してこの回を終えよう。「青年
期にまわり道することは一生のこのころの旅の内容にと
って必ずしも損失ではなく、たとえもし青年期を病の中
ですごしたとしても、それが後半生で充分生かされるこ
とが少なくない。落伍者のようにみえた青年の中から、
のちにどれだけ個性ゆたかな人生を送る人が生まれたこ
とであろう。それは彼のこのころの道中で、順調に行った
人よりも多くの風景に接し、多くの思いにころろが肥沃
にされ、深くたがやされたためであろう。そのためにや
っと「わが道」にたどりついたとき、すらすらと一直線
でそこに来た人よりも独特なふくらみをもった、人のこ
ころにせまる仕事をすることができるだろう。」「このこ
ろの旅」一九八二年）

参考文献（前回分への追加）

神谷美恵子『このころの旅』みすず書房 一九八二
ホイジンガ『中世の秋』堀越孝一訳 中央公論社 一九七一

